

Rapport

ラポール

Asahikawa Kosei Hospital



2020
02

心臓
力テ
ーテル
。



ドクン。 波打ち続ける生命の鼓動。
拡張と収縮を繰り返し、身体中に血液を循環させるポンプの役割を担うのが「心臓」である。

心臓が体中に血液を循環させることで、全身の細胞に酸素や栄養が届き、はじめて体の器官が正常に働く。人の体内では、生まれてから死ぬまでこの動きが止まることなく繰り返されるのだが、当然、加齢や病気などによって心臓の機能は徐々に低下していく。

「心筋梗塞」「狭心症」「心不全」「不整脈」：

テレビや新聞でよく目にする病名。これらの病気は心臓やその周囲の血管が詰まるなどして、血流に異常をきたすことで引き起こされる病気—いわゆる「心臓病」の一種なのである。

著しく高齢化が進む近年の日本社会において、この心臓病は「がん」に次いで多い死因の一つで、その数は死亡者全体の約15%以上を占める。今や6～7人に1人が心臓病で亡くなっているのである。

「心臓＝命」そういうても良いだろう。

人間の生命を維持し続ける心臓は無論、私たちが健常的な生活をおくるために、最も大切な器官といえる。

全国でも多くの人が命を落とす病、心臓病。

その中でも「心筋梗塞」「狭心症」などの虚血性心疾患はとりわけ患者さんの数が多い。

ここ旭川厚生病院循環器科では、「心筋梗塞」や「狭心症」をはじめとする様々な循環器疾患に対し治療を提供し、市内だけでなく市外からも患者さんが来院し、地域住民に根付いた地域医療を提供し、患者さんの健康に寄与している。

旭川厚生病院循環器科。

では、医療現場をご覧いただこう。



Circulatory organ

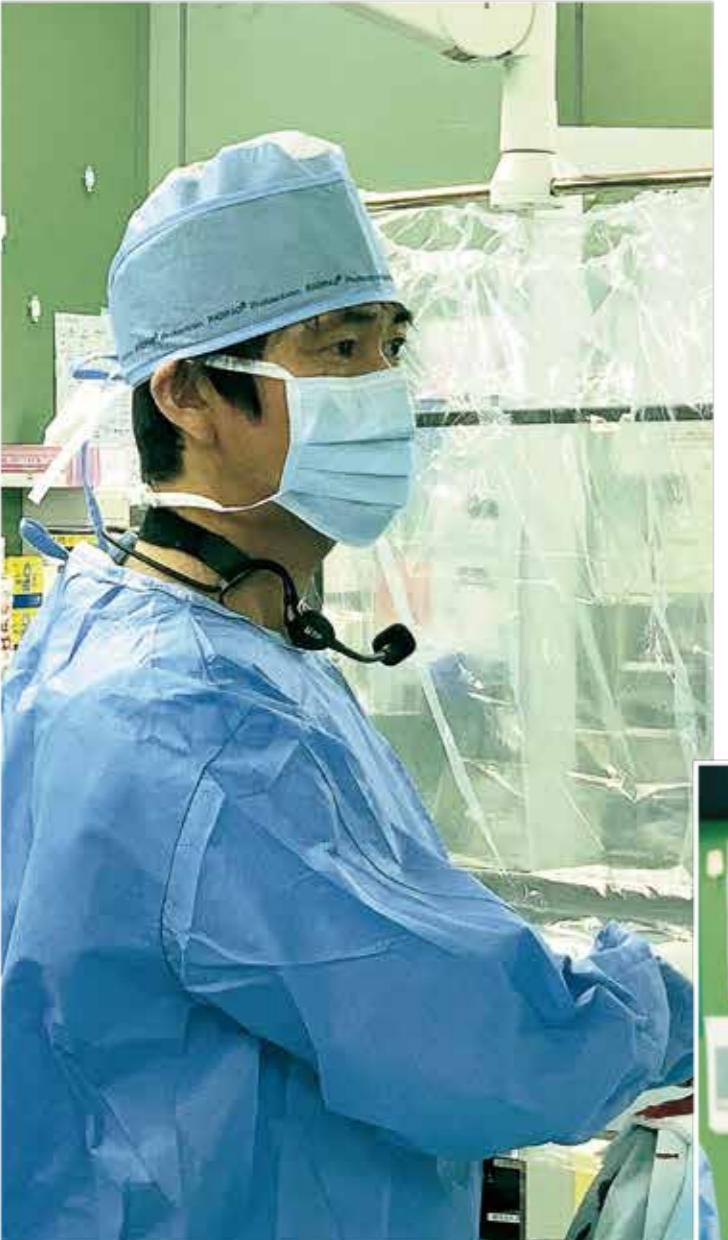
心臓を守る一本の管

虚血性心疾患に多く用いられる治療が「心臓カテーテル」。これは、心筋梗塞など心臓周囲の血管の詰まりから起こる虚血性心疾患に用いられる治療法である。

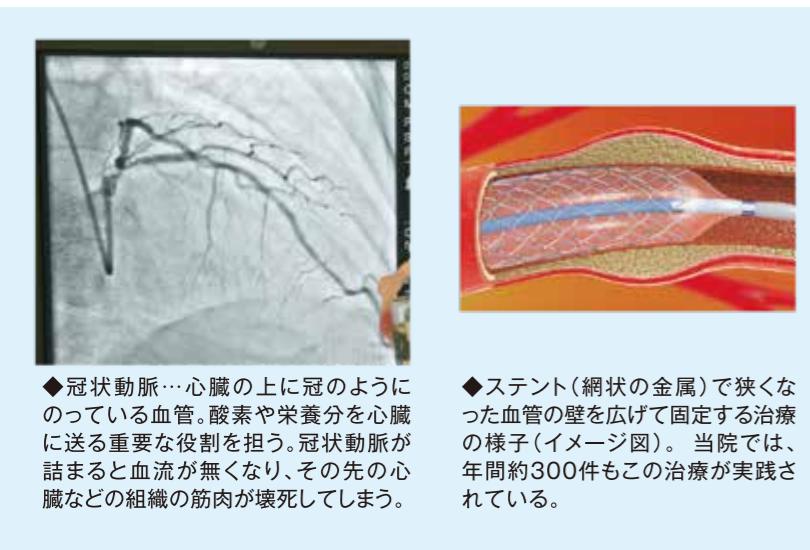
手首や足のつけ根の動脈から直径数ミリ以下の細い管（カテーテル）を血管内に通していき、血管の詰まった部分を様々な方法で除去するというもの。その方法の中でも、代表的なものは、血管内にカテーテルとともに、バルーン（風船）を挿入して膨らませ、狭くなつた血管を拡張させたり、ステント（網状の金属）を用いて血管の壁を固定したりするものがある。

そして、この心臓カテーテル治療の最大の魅力は、患者さんへの負担の少なさにある。全身麻酔によつて開腹・開胸する大掛かりな外科手術とは異なり、血管から細い管を挿入して、患部を治療するカテーテル治療は、傷口も小さく、使う麻酔の量も最小限（局所麻酔）である。ゆえに患者さんの体にかかる負担が少なく、合併症のリスクを下げることができ、治療後の入院期間も約3日程度と、とても短い。

このように心臓カテーテル治療は、心臓疾患に苦しむ患者さんが、いち早く健康体で社会に復帰するために、実に重要な存在となつている。
なお、ここ旭川厚生病院循環器科では、カテーテルを使った治療を年間約300件実施している。



いくつものモニターで血管内部などを慎重に確認しながら、治療を進める医師。血管内部を傷つけないよう細心の注意を払う。心臓カテーテル治療には迅速かつ正確な状況判断が要求される上、難しい治療には高い技術と豊富な経験が不可欠である。



◆冠状動脈…心臓の上に冠のようになつてゐる血管。酸素や栄養分を心臓に送る重要な役割を担う。冠状動脈が詰まると血流が無くなり、その先の心臓などの組織の筋肉が壊死してしまう。

◆ステント（網状の金属）で狭くなつた血管の壁を広げて固定する治療の様子（イメージ図）。当院では、年間約300件もこの治療が実践されている。



最新鋭の

矢 療技術を

駆使して



サポートする最新機器



旭川厚生病院循環器科では、虚血性心疾患などが疑われる患者さんに對し、「CT検査」を積極的に行っている。診察で症状が見つかったからといって、すぐにカテーテル治療で対処するのではなく、まずはCT検査で丁寧に体の中を検査することで、より症状に合わせた治療を行うことができるからである。

実際にCT検査で症状を調べた結果、カテーテル治療が不要だと判断できるケースも少なくない。

冠状動脈CT解析の件数は年間で約500件にも上る。このように、旭川厚生病院循環器科では、最新鋭の医療技術を駆使し、診察や治療に役立てることで、患者さんを第一に考えた柔軟な医療を提供している。



治療を実施できるのは、当院循環器科が誇る大きな魅力の一つである。

慢性完全閉塞とは、冠状動脈が動脈硬化してから、3ヶ月以上完全に閉塞している状態のことを指す。数ある心疾患治療の中で、最も難易度が高いといわれている症状、それが慢性完全閉塞である。

難しい症例であるため、実際に治療できる医師は、全国でも少数であるが、当院の鈴木医師はCTO(慢性完全閉塞病変)治療の認定術者であり、これまで多くの慢性完全閉塞に苦し

む患者さんを症状から救ってきた実績を持つ。

慢性完全閉塞の多くは、1方向からのカテーテル治療では血管を十分に通過できない。そのため、別のルートからつながっている血管より迂回し、逆側(2方向)から同時にカテーテルで治療する「逆行性アプローチ」という高難易度の手法が取られる。患者さんにとって負担の大きい外科手術に頼ることなく、低侵襲のカテーテル

最善の治療を

考
える—○



旭川厚生病院 循環器科の治療方針

旭川厚生病院循環器科では、循環器疾患の急性期治療、慢性期管理から生活習慣管理・禁煙治療などの予防医療にまで幅広く取り組んでおり、虚血性心疾患（心筋梗塞・狭心症など）、末梢動脈疾患が疑われる患者さんに対しては積極的にCT検査を行う。CT検査で病変が見つかった場合には、患者さんに入院していただき、カテーテル治療の適応であれば、画像診断機器を用いて治療方針を決定する。

また、高齢の方や病状が重く治療の難易度が高いとの理由で、他院で治療が困難なケースでも当院で治療を実施するケースもある。

《主な対象疾患》

虚血性心疾患、弁膜症、不整脈、心不全、高血圧、脂質異常症などの生活習慣病全般、末梢動脈疾患

慢性完全閉塞などの難易度の高い症例の治療にも取り組んでおり、その

治療技術は近年大きな進歩を遂げ、以前は困難であった症例でも治療できる場合が増えてきているのである。また、末梢動脈疾患に対するカテーテル治療にも積極的に取り組んでおり、その代表症例は「下肢閉塞性動脈硬化症」。跛行（歩くと足が痛くなる）が主な症状で症状が悪化すると潰瘍・壊死に至り、下肢切断の危機となることもある（重症下肢虚血）。

治療方法としては、薬物療法、運動療法に加えてカテーテル治療があるが、患者さんの症状に合わせて最善の治療方法の選択を心がけている。

若手の育成、 海外交流を図り技術を世界へ

日本全国で高齢化が進む中で若手医師の活躍なくしては、今後の医療業界の発展は見込めない。

旭川厚生病院循環器科でも若手育成の教育体制強化に力を入れている。若手医師たちには、最先端で質の高い教育プログラムが用意され、最新の医療機器がそろう環境を生かし、シミュレーターでのトレーニングやライブシステムを活用している。そして豊富なカテーテル治療の経験を持つ先輩医師とともに、手術現場で多くの実践経験を積むことで成長を続けている。

さらには、定期的に海外へ足を運び、現地の医師と交流を図ることで、まだまだ技術力の足りていない多くの国へ、日本の最先端の技術を伝える活動を行っており、日本だけに留まらず世界各国の医療現場に携わっている。





カテーテル治療

実は道北地方では、この治療法を知らない人が多く、旭川地区のカテーテル治療の数（人口当たり）は、札幌圏あるいは他の医療圏と比べてまだまだ少ないのが現状である。

鈴木医師は「数多くの症例経験から治療技術も向上し、複雑化する病変に対するカテーテル治療にも対応できる技術力が備わっています。他の医療機関で高齢のため受け入れを断られた患者さんや、原因不明の痛みなどでお悩みの患者さんは、諦めてしまわず、ぜひ当院に相談してほしい。きっと患者さんの力になる事ができます」と力強く語る。



“病院として描く「チームワーク」で支える未来の地域医療”



前回の「泌尿器科」を題材に制作取材・撮影させていた際にも感じたが、「循環器科」もまた、チームワークがとても良い。

ペテラン医師と若手スタッフたちとの距離は近く、短い撮影時間の中でも互いに気兼ねなく話をする姿や、終始明るい笑顔が飛びかっていた。

こういった環境は病気の不安を抱えて来る患者さんも、安心して治療を受ける事ができるだろう。

医師たちは「苦しんでいる患者さんを一人でも多く笑顔にしたい」と、日々膨大な数の患者さんと向き合い奮闘している。

強く成長を望む医師たちが揃っている旭川厚生病院循環器科。今後の活躍にも目がはせない――。

旭川厚生病院循環器科では道北地方のカテーテル治療で多くの症例数を誇り、7名の医師と経験豊富なスタッフが、多種多様な症例の治療にあたっている。また、365日24時間体制常時、緊急症例に対応する受け入れ態勢を整えている。

7 Doctors | 地域の皆さまが安心して暮らせる医療環境に貢献します!



Yuji Ogawa
副院長 小川 裕二



Toru Kitsuka
主任部長 貴田岡 享



Takahide Suzuki
部長 鈴木 孝英



Akira Asanome
医長 浅野目 見



Toshihiro Hirai
医長 平井 俊浩



Kaichiro Shibayama
医長 柴山 佳一郎



Koichi Akita
医員 秋田 混一





J A 北海道厚生連 旭川厚生病院

〒078 - 8211 北海道旭川市1条通24丁目111-3 TEL.0166-33-7171 FAX.0166-33-6075

「Rapport（ラポール）」とは、フランス語で「つながり」「架け橋」、心理学用語で『信頼関係』を意味する言葉です。本誌は、旭川市のシンボル「旭橋」のように地域の皆様と当院がつながり、信頼関係を築けるような広報誌を目指します。

